TALK トーク21

元気を送る農の楽しさ

きょうの「トーク21」のゲストは、「食と農からの地域再生」をテーマに全国各地を取材してきた食環境ジャーナリスト・金丸弘美さん。食育事業の企画推進に尽力し、総務省地域力創造アドバイザーも務めています。お相手は、総埼玉の農村青年委員長として活躍する、営農家の斎藤貴一さん。

農業で明るい地域の再生を！ 二人の語らいは、未来を思う大情熱にあふれていました。

耕さない田んぼ？

斎藤　金丸さんは15年近く、農業・環境・食育について、全国を取材してこられたとうかがっています。

金丸　かれこれ800カ所の農漁村を取材しました。その地域ならではの特徴を上手に生かしたブランド化が成功して、地域全体も元気になっているところが増えてきた感があります。私は「かっこいい田舎」と言っているんです（笑い）。

斎藤　「本物の良さをもっと多くの人に味わってもらいたい」という熱意と頑張りが共感の輪を広げる――。金丸さんの著書やホームページで紹介されている事例を読んでいくうちに、私自身も全国に元気を送る農業者になっていきたいと、夢がふくらみました。

金丸　そういう希望を広げていきたいんです。農家の現実は、とても大変じゃないですか。価格の安い輸入品との競争、地域の過疎化。都会も多くのスーパーでは売り上げが落ちていて、販路は簡単には開けません。

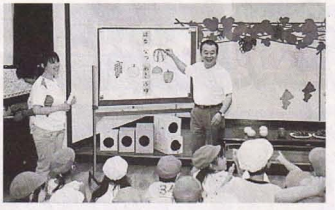
斎藤　まさにその通りです。価格競争では、とても輸入物には勝てません。私としては、安全な作物づくりを心掛け、品質にこだわっています。

金丸　食の安全は本当に大切です。「耕さない田んぼ」（不耕起栽培）という面白い取り組みがあるんです。

コメづくりは大変な労力が必要ですが、ある農業指導者が、その負担を軽減できないか、と考え出したんです。冬も田んぼの水を抜かず、土を耕さないでおく。すると、ドジョウやタニシ、鳥など、たくさんの生き物が戻ってきて、科学調査をしてみると、雑草の繁殖を抑えたり、天然の肥料になったりと、メリットが大きいことが分かったんです。

斎藤　薬剤や化学肥料が少なくて済むんですね。

金丸　ええ。苗や植え方を改善するなか、無農薬のコメが「食の安全」を求める消費者の支持を受け、生産に取り組む地域も増えてきました。さらに、鳥たちと共生する田んぼの環境や景観が、新たな観光資源になる。コウノトリの保護へ官民挙げて取り組んでいる兵庫県豊岡市は、特に有名で、年間48万人が訪れるようになりました。



「スイカはどの季節かな？」。果物のなる季節や味について、幼稚園児たちに教える金丸さん（東京都内）＝本人提供

砂漠に緑を再び

斎藤　専業農家になってまだ5年の私ですが、夢はモンゴルから青年たちを招いて研修を行い、砂漠地帯での農業復興に貢献することなんです。

金丸　奥さま（ウヌヌルーさん）もモンゴル出身でしたね。

斎藤　はい。以前、緑化を進めるNGO（非政府組織）の一員としてゴビ砂漠に行き、4年間で2万本のポプラの木を植えました。妻とは、そのときに出会ったんです。

金丸　モンゴルといえば草原。なぜ、砂漠が広がったんですか？

斎藤　近代化が進む中で自動車が増え、草原を踏み荒らしてしまったそうです。「ふるさとが好きになれない」という現地の子どもたちの言葉が、胸に刺さりました。

金丸　状況は違うけれど、日本でも、ふるさとの素晴らしさが失われてしまって、閉塞感を抱えている地域は、決して少なくないと思います。

斎藤　自分たちで地域を耕していく農業の発展こそ、彼らの希望になる。そのために貢献できればと、現地の大学院で乾燥地農業を学び、さらに米国に渡って2年間の研修を体験しました。

今は埼玉で農業者として力を磨いています。将来は必ず、彼らのために貢献していきたいです。

金丸　頑張ってください。私にも、生産現場にこだわるようになったきっかけがあります。次男がまだ小さかったころ、食品添加物でアレルギーを起こし、顔も体もやけどのようになったことがあったんです。

NGOのモンゴル駐在員の一人として、斎藤さん（右端）は4年間で約2万本のポプラを植樹した＝本人提供

顔が見える関係こそ

斎藤　今、「食育」に注目が集まっています。ユニークな取り組みと評判の、ワークショップ（体験講座）について教えてください。

金丸　家政学部の学生たちに、お弁当をつくって持ち寄ってもらう講座は面白いんですよ。栄養のバランスを考え、実際に素材を選ぶなかで、彼女たちの目が輝いてくるんです。「祖父の畑で取れた野菜を使いました」「朝早く起きてつくるのは大変だけど、毎朝こうやってつくってくれていた母はすごい」と、本音の声が返ってくる。

斎藤　体験のなかで自発性が引き出されてくるんですね。

金丸　幼稚園や小学校などの要請を受けて行う場合も、種類の違うコメを炊いて食べ比べをして、味の違いを話してもらったり、産地から取り寄せた果物を、手触り、においなどの五感を通して体験し、表現してもらったりする味覚講座を行います。

斎藤　ファストフードなどの加工食品が味覚を鈍らせているという指摘もあるなか、重要な取り組みですね。

金丸　生産者と消費者が交流を深めて「顔が見える関係」になってほしいですね。主婦なら「あの農家が作った作物なら安心だし、家族でまた食べたい」。学校給食の調理師さんなら「友達の孫のために、いい食材を選ぼう」となる。

そうした絆を広げていけば、偽装などの問題はなくなっていく確信があります。

斎藤　「食」のつながりは「いのち」のつながりなんですね。

金丸　食文化は、突き詰めて言えば生き方そのもの。本当に信じられる物を選んでいくことが大切です。

斎藤　インドの農業改革を推進されたスワミナサン博士が、池田名誉会長との対談で「農民の幸せな笑顔が、その国の幸福を決める」と語られた言葉を思い起こします。人々の幸福を支える農業者の誇りを胸に、朗らかに前進してまいります。

食環境ジャーナリスト
金丸 弘美さん

「かっこいい田舎」が光る時代を

かなまる・ひろみ　1952年、佐賀県生まれ。食環境ジャーナリスト。全国の農漁村を巡り、農業・食材・環境問題などについて取材・執筆を続ける。総務省地域力創造アドバイザー。大妻女子大学家政学部非常勤講師、明治大学農学部兼任講師。ラジオ、テレビ出演も多い。著書に「田舎力」（NHK出版）ほか多数。

総埼玉農村青年委員長
斎藤 貴一さん

「農民の笑顔」がその国の幸福に

さいとう・たかいち　1971年、埼玉県生まれ。営農家。創価高校時代、環境問題に関心を深める。大学卒業後、モンゴルで植林活動に従事した。農業研修で米国にも。帰国後、2005年に専業農家として出発。07年には認定農業者に。牙城会総埼玉副委員長、第4埼玉総県男子部長として、友の励ましに奔走する。